

Title	書評リプライ :
Sub Title	
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.179- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル : 「著者リプライ :」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評リプライ：

鈴木 正崇

ミャオ族との出会いは 1983 年に遡る。中国が文化大革命の混乱を経て、改革開放によって徐々に立ち直り外国人に門戸を開きつつあった時期である。当時、中国から伝わる情報は断片的であったが、華麗な刺繍の民族衣装をまとい沢山の銀飾りを身につけたミャオ族を写真や映像で見た時の衝撃は忘れられない。日常生活では耕して天に至ると言われる棚田を営々と耕して米を作って主食とする。日本人とは全く異なるようでありながら、どこかで繋がっているようなミャオ族とは一体何者なのか。本書は素朴な問いを抱えつつ、同時代人としてミャオ族とつきあう中で理解を深めてきた試行錯誤の記録と考察である。

石井香世子さんは北タイの山地民の調査を皮切りに観光化や移住など現代の流動する世界の中での少数者や社会的弱者の在り方を、ジェンダーの視点も含めて調査研究している新進気鋭の研究者であり本書の特徴を的確に捉えている。評者の言う通り、現代は村や国などの「境界を越えた」フィールドへと調査の空間を拡大する必要に迫られている。本書で描いたミャオも中国内で完結して暮らしているのではない。特に 1975 年以降はラオスにいる支系の山地民のモンが政治難民となってタイに脱出し、アメリカ、オーストラリア、フランスなどに散らばって、ディアスポラの民となった。彼らは 20 年ほどの間に新たな社会的ネットワークを構築して世界各地で活動を活発化している。しかし、文字を持たず口頭伝承で生きてきた山地民が、一挙に都市に放り出され、グローバル化に直面した時の試練は想像を絶するものであった。その状況を描いたクリント・イーストウッド監督の『グラン・トリノ』(2008) によってアメリカのモンはその存在を知られることになったが、移民社会の中での適応の困難さが浮き彫りになっている。移動や移住によって止めどなく広がっていく社会的ネットワークは複雑で流動的で、創造される文化も多様である。こうした場の研究では従来の文化人類学の理論や文化の概念は有効性を疑われる。その意味では、若い研究者はもっと果敢に「境界を越える」場所でフィールドワークを行い、本書を軽やかに乗り越えていくことを期待したい。私自身はアジアの全体を視野に入れつつ、異文化の人々との交流を続け、更なる理解を深めていきたいと願っている。

(すずき まさたか 慶應義塾大学文学部)